

知ってますか？こんな取り組み

Stay Forest

森林をみんなの居場所に

下草野地域にある標高300mの山。山頂近くに位置する大岩の名前にちなみ、「八丈岩」と皆に呼ばれている里山を地域住民に親しんでもらおうと、登山ルートや麓の環境の整備に取り組むのが市民活動団体「Stay Forest」です。

市内在住の30～70代10人で構成。団体の代表である伏木剛さん、梨絵さん夫妻は同地域在住。夫婦の共通の趣味が登山で、近隣の山々を眺めるうちに、こうした山々が多くの人遊び場になればいいという思いが生まれました。

八丈岩の地主さんの快諾のもと活動がスタート。かつての登山道は、今やほとんど人が入らないため危険な箇所も多く、メンバーと話し合いながら月に1回、ルート計画や再整備をしています。梨絵さんは「思いをきちんと言葉にして伝えたことで、協力してくれる人が増えていった」と結成当時を振り返ります。

夢は、大人も子どもも気軽に親しめる森の再生です。なかでも大岩からの眺望は絶景で、下草野地域が一望できます。「それほど高くないため、子ども達でも登れる。森の中で過ごす心地よさや、森にあるもので工夫して遊ぶ楽しさを知ってほしい」と梨絵さん。

剛さんは「高齢化が進み、山の所有者だけでは維持管理が難しくなってきました。そんななかで森に人が入ることで獣害対策にもなる。整備することで地域の共有財産として地元に根付いてほしい」と希望を込めます。

取り組みはまだまだ途上ながら、人と森との関わり場が生まれてきています。

(コーディネーター大川千里)



▲楽しみながら活動するメンバー

▼八丈岩からは下草野地域がよく見える



付せん

編集後記

新しい議論の進め方を

地域づくり協議会が誕生して、約15年。協議会ごとにまとめた「地域づくり計画」のもと、地域づくりが展開されてきました。しかし、人口減少や少子高齢化の急激な進展、コミュニティのスポンジ化など地域環境が厳しくなっています。これまでのやり方・仕組みでは、地域課題の解決は困難です。改めて「なぜ」「何のために」「何を大切にするのか」を議論し共有、合意する機会と場が必要です。また、これまでにない当事者が関わる新たなつながりを編み直すことも必要です。

地域円卓会議」と「地域診断」の手法の研修

今年度、当センターでは、新しい議論の手法として「円卓会議の手法を学ぶ研修会」に加え、「地域診断の手法を学ぶ研修会」を市民の皆さんを対象に開催。後者の研修会では、よりよい地域の創造をめざすための地域分析手法を学んでいただきました。人為、生態、気象、地学の4つの視点から、地域の本質的な特性を把握し、ビジョンを描き、地域資源の活用を図りながら、課題や問題点を克服しつつ、良い点を伸ばすことをめざします。

新しい地域づくりの展開へと

市では、人口動態や各種保健などの統計データを、地域ごとにまとめた「地域カルテ」情報を提供。加えて住民アンケート結果など量的なデータとともに、ヒアリングやまち歩きなどでの住民の生の声といった質的なデータを組み合わせることで、よりリアルな意見が反映された分析となるでしょう。また、行政などの関係機関、さらには地域外の人の生の声を聞くことが、地域課題の特定と整理を行う重要なポイントとなります。

まずは、楽しく、円卓会議、地域診断ワークショップを行いませんか。新しい地域づくりへのきっかけとなると思います。当センターまで、気軽にお問い合わせください。

(コーディネーター田中省吾)

ご意見をお寄せください！

掲載内容に関して皆さんからご意見をいただきたいと思えます。感想はもちろん「こんな内容を取り上げてほしい」「うちの地域ではこんなことに困っている」といったリクエストや情報も大歓迎です。QRコードから専用ページにアクセスください。

コラボ！読者アンケート入力フォーム



ながはま市民協働センター通信

コラボ！

Collabo!
2021
12
vol.06

特集

若い世代から見る地域活動



コラボ！ 今号の表紙

「深さも流れもけっこうある！」「川から見るまちの風景ってこんななんや」。11月、中心市街地を流れる米川に、市内の高校生有志が入り、ゴミを拾いがてら歩きました。当センターが今年度行う「高校生プロジェクト」のフィールドワークのひとつで、長浜地区地域づくり連合会が案内。水辺の空間づくりに取り組む連合会の活動を知ること、地域に関心をもってもらうきっかけにしています。

このまちに住んでよかった。長浜に暮らすみんながそう思えるように、さまざまな団体や個人が活動しています。その活動のかたち＝「長浜の市民協働」の今を伝えていきます。紙面の企画・編集・取材執筆・デザインはすべてながはま市民協働センターコーディネーターが担っています。

発行

ながはま市民協働センター

滋賀県長浜市高田町12-34さざなみタウン ながはま文化福祉プラザ
tel.0749-65-6525
8:30～21:30 (火曜休館)
mail:katsudou@city.nagahama.lg.jp
http://www.nposhiga.com/



若い世代から見る 地域活動

活動の後継者がいない、担い手になってくれる人が見つからない…。
自治会、地域づくり協議会、市民活動に関わる人からしばしば聞く言葉です。
どうすれば若い世代を地域の取り組みに巻き込んでいけるのでしょうか。

取材・文/矢島鞠子 レイアウト/桐畑淳 (コーディネーター)



そもそも必要とされているのか

とはいえ、地域の役に立ちたい、良くしたいと思う若い人もいます。ただ、実際に活動に加わり、参加してはみても、継続に至らないケースがあります。
「会議に参加しても意見すら求められない」、「取り組んでいる活動が可視化されておらず、何を求めているのかわからない」「若手の存在が助かっているのか不明」。聞こえてくるのはこんな声です。「人足がほしいだけではないのか」と思ってしまう。こう話す30代男性もいました。

担い手、後継者不足の問題を考えると、活動に参加しない側の気持ちや姿勢に焦点が当てられがちです。ライフスタイルの多様化や地縁関係が薄くなったといった社会全体の傾向はあるものの、組織や活動のあり方について、本当に若い人を受け入れる体制になっているか、見直す必要もありそうです。



▲長浜曳山まつりの行事のひとつ「裸参り」はまさに若い世代が主役だ（提供：長浜ローカルフォト）

お金を払えばいい

「長浜のことは好きだけど、地域の活動には参加したくないです。草刈りなどはお金を払って業者さんにしてもらったらいいのでは？ 住民がわざわざしないといけない理由がわからない」

これは『自治会の取り組みや地域でのボランティア活動に関心はありますか』と尋ねたときの市内在住20代女性の回答です。女性も続けて「対価を得られない活動に興味はない」と話しました。

住民が「わざわざ」汗をかくのは、自分たちの地域は自分たちで守り、良くしていこうという住民自治や市民活動の原点に基づくものです。しかしながら、20～40代前後の若い世代が地域のことに関わる姿は決して多いとはいえません。市北部の山林の保全活動を続ける60代男性は「活動に加わってくれる若手がない。このままではあと10年のうちに取り組みが消滅してしまう」と嘆きます。市民活動や地縁組織に関われば、つきものの課題です。

時間がない、余裕がない、興味がない——。若い世代が地域活動に消極的な理由として返ってくる言葉です。さらに冒頭のように活動の内容そのものを合理的でない、非効率だと考える人がいます。

◀こうした保全活動は市内各所で行われているが、若手の姿は少ない

活躍できる場

こうした傍ら、祭礼行事などを引き継ぎ、満足する姿もあります。湖北町山本出身の吉田晃さん（32）は、山本の高校生から30代までで構成する「青年会」の副会長を務めています。活動は、毎年開催される秋祭りでの青年みこしの計画実行がメイン。該当世代はたいていが参加し、貴重な交流の機会になっているといいます。吉田さんは結婚し、現在山本を離れているものの会の活動に関わることはまったく厭いません。
「祭りでは子どもみこしもあって、幼い頃から楽しみな行事でした。そして世話をしてくれる大人も祭りを楽しんでいる姿が強く記憶に残っています。みんなが楽しみながら続けてきた祭りを、僕らも守っていくのが当たり前という感じです」

長浜曳山まつりも、伝統が若い世代に脈々と受け継がれている例として挙げられます。若い衆と呼ばれる世代が祭りの実質的な運営を担い、それより上の世代は原則見守りの姿勢。山本集落のように「してもらってきたからするのが当然」という意識とともに、「若い衆が主体性をもって活躍できる場があるから祭りが続く」と関係者は分析します。

世代間のギャップ

30年にわたって活動を続ける市内の景観保全活動団体では、メンバーは60～70代が中心。ただ、後継者不足に取り立てた危機感はなく、皆が楽しみながら取り組んでいます。あるメンバーは「若い人は忙しいだろうし、地域のことを考えるというのがそもそも無理。ある程度歳を重ねると、自分の住むところに関心をもつようになる。そのときに始めたらいい」と話します。「自分だって、若い頃にこんなことに興味なかった」。

自らの地域の課題解決や活性化について、その方法や考え方は世代や性差、価値観などによって異なります。今存続している活動の形式や組織そのものが必ずしも引き継がれなくとも、次の世代による新たな活動として刷新されることもあります。

金居原の歴史と森を守る会の山田さん（中央）がガイドする森林ツアーなどをきっかけに新活動団体が発足（提供：ながはま森林マッチングセンター）



▲高時地区地域づくり協議会子ども部会の運営メンバー。若い世代が多く、活気にあふれている（提供：同協議会）

いろんな人が関わる

木之本町杉野地域で、新しい市民活動団体が発足しました。30～40代の市内在住・勤務者でつくる「もりのもり」です。山間地ならではの同地域の自然や暮らしの魅力を積極的に情報発信し、保全活動やツアーなどを企画開催していこうとしています。この背景にあるのが、一帯の深刻な高齢過疎化・少子化。内外問わず杉野地域に関わる人を増やし、にぎわいが生まれる手立てにしたいと考えています。各集落で人手不足に困っている活動や伝統行事などにも協力していくつもりです。

団体発足のきっかけともいえるのが、同地域集落の金居原住民でつくる「金居原の歴史と森を守る会」の活動。集落の大切な遺産である巨木群や鉱山跡の保全や活用の取り組みに、もりのもりのメンバーが魅せられたことが影響しています。同会の一員である山田洋さん（72）は新団体発足に関して「どんどんやってくれたらいい」と、協力を惜しみません。

もりのもり発足人である北川勇夫さん（42）は杉野地域の音羽の出身で、今は市内の別の地域に暮らします。「自分のように杉野を出てしまったけれど、ふるさとが元気であってほしいと願う人たちがいます。そのなかにはちょっとなら地域のことを手伝えるという人もいます。『ちょっと』で十分なんです。いろんな人が少しずつ関わって杉野を盛り上げていくことができれば」

